

▼チェルノブイリ 20年【A4・ラミネート・カラー】 …計 38枚



【1】

ベラルーシ共和国ゴメリ州ブラギン市ソンニチ村。チェルノブイリ原発より北西50kmに位置する。汚染地域の入り口に立てられた放射能汚染警告と出入りを禁止する標識。



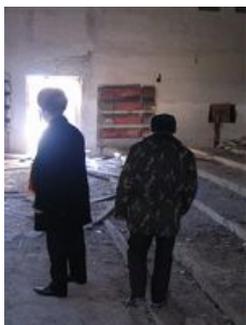
【2】

さらに先へ進むと、罰金を警告する標識が立てられている。



【3】

ソンニチ村にあるコルホーズ(集団農場)・ソホーズ(国営農場)労働者のために建設された住宅。建設から2年後、1986年のチェルノブイリ原発事故で全ての住民がミンスク市など他の町へ移住させられた。



【4】

かつては村の多くの住人で賑わったと思われる映画館の廃墟。現在、汚染地域への立ち入りはブラギン市執行委員会(日本の市役所・区役所にあたる機関)のチェルノブイリ問題担当部局に申請して、担当者の同行の上、取材しなければならない。



【5】

1986年4月26日のチェルノブイリ原発事故から3日後に生まれた女性。日本・ベラルーシの合同検診で甲状腺がん(乳頭がん)を指摘され、甲状腺悪性腫瘍病院で手術を受けた。術後のフォローのため2006年に再び診察を受ける。



**【6】**

彼女は現在1児の母である。検診で早期にがんが発見されたため、適切な治療を受けることができ、妊娠・出産も順調であった。チェルノブイリ原発事故から20年を超え、事故当時の子どもたちが結婚・妊娠・出産を経験する時期を迎えている。



**【7】**

ゴメリ市のメインストリートにあったベラルーシでの大統領選挙(2006年3月18日に行われた)のポスター。左端が4期目の当選を果たした現職のルカシェンコ大統領。



**【8】**

ゴメリ郊外にある墓地。ここには第二次世界大戦における村出身の戦没者たちが埋葬されている。旧ソ連邦の第二次世界大戦の戦死者は2000万人に及んだと言われている。ベラルーシ国内の各村には、戦没者たちの墓と記念碑が建てられている。



**【9】**

ベラルーシ共和国ゴメリ州ホイニキ市(人口約25,000人、チェルノブイリ原発事故前の半分になった)から車で20分のところにある「地図から消えた村」グバレビッチ。事故後、住民は強制的に移住させられた。原発から北西約50km。



**【10】**

グバレビッチ村に暮らすナージャおばさんと孫のセルゲイくん。2006年現在、この“地図から消えた村”では19世帯の家族が生活を営んでいる。



**【11】**

ナージャおばさんの家の中。夜になるとウオッカを目当てに村の若者が顔を出す。ジャガイモ、キュウリ、トマト、玉ねぎなど、ほとんどの作物は自給自足。ほかに、豚 3 頭、にわとり、うさぎを飼っている。



**【12】**

移住先での新しい生活になじめず、住み慣れた村へ帰ってきた彼らのことを人々は“サマシヨール(わがままな人)”と呼んでいる。



**【13】**

ナージャおばさんの家の庭の井戸。この井戸水で全ての炊事をまかなう。井戸周辺の放射能レベルは広島の 3 倍くらい。村の池週県では測定器がふり切れる所もあるが、住宅地のレベルは高くない。ホイニキ市執行委員会ではこの村でのキノコ類、牛乳の売買は許可していない。



**【14】**

地下で保存されている大量のジャガイモ。ベラルーシではジャガイモを使った料理のレシピが 500 以上あると言われている。



**【15】**

事故後 20 年が経過した人家。こうした廃墟にも旧ソ連の各共和国やベラルーシ国内の非汚染地域からの移住者が住むようになった。祖国で民族紛争が勃発したり、安定した職に就くことができなかつたりなどしたため、汚染地域での安住の地を求めてきた彼らにとっては、銃や争いよりも目にみえない放射能のほうがよっぽど気が楽だという。



**【16】**

グバレビッチ村にある第二次世界大戦(旧ソ連邦においては「大祖国防衛戦争」)戦没者記念碑。ナージャおばさんの孫セルゲイくんが自分の曾祖父の名前を見つけ、指差している。



**【17】**

雪解け時のグバレビッチ村の風景。4 月になると村のいたるところで雪解け水の湖ができる。チェルノブイリ原発事故の起きた 1986 年当時と変わらぬ春がまた、この村にも訪れる。



**【18】**

村を離れ、ゴメリ市内にいる長女の家への移住を決めたニーナさん。別れを惜しみ、慣れ親しんだ家の前で写真に納まる。ここには先に他界した夫や 16 歳の若さで亡くなった長男との思い出が詰まっている。



**【19】**

ウクライナ共和国ドニエプル川より北東、チェルノブイリを望む。



**【20】**

チェルノブイリ 10km ゾーン検問所。ゾーン内の立ち入りには許可が必要となる。チェルノブイリ原発事故周辺の立入禁止ゾーンは半径 30km で、そこにも検問所がある。



**【21】**

ゾーン内に建てられたチェルノブイリ原発事故 10 周年記念碑。4 月 26 日が近づくと、かつてその地で暮らしていた住民たちが各地から故郷に帰ってくるという。



**【22】**

プリピャチ川に浮かぶ事故処理に使われた船。大量の放射能を浴び、今は廃船となった。原発事故後、この川で魚を取らなくなったので、今ではずいぶんと大きな魚が住んでいるという。

**【23】**

10km ゾーン内の“消えた村”カパチ。かつての住民の生活は村ごと地中へと消されてしまった。この村と同じ運命をたどった村は500以上存在する。

**【24】**

1986年当時、建設中であったチェルノブイリ原発5,6号炉。当時のままクレーンはストップしている。この地に12基の原発が建設される予定であった。

**【25】**

事故を起こしたチェルノブイリ原発4号炉。“死の灰”の放出を防ぐため石棺で覆われているが、老朽化が進み、崩壊の危険性やひび割れから染み込んだ雨水による地下水の汚染も懸念されている。

**【26】**

チェルノブイリ原発では手前のプリピャチ川を冷却水として利用していた。プリピャチ川はドニエプル川へとつながる。

**【27】**

かつての原発労働者の町“プリピャチ”の入り口。毎年4月26日、各地からかつての住民たちが帰ってくる。現在も18歳以下の子ども入市は制限されている。

**【28】**

プリピャチ市内の幼稚園。園内には当時の掲示板や写真がそのまま残っている。



**【29】**

園内に残されていたアルバム。この子どもたちは生きていればすでに20歳以上の成人になっているはず。何処で、どのように暮らしているのだろうか。



**【30】**

園内のお昼寝ルームも事故当時のまま。ベッドやおもちゃとともにガスマスクが混在した状態で、時だけが経過している。



**【31】**

無人の街にたたずむ“プリピャチの観覧車”。稼働前に原発事故が起こったため、ここに人々が集うことはなかった。



**【32】**

原発事故から20年。ウクライナ共和国キエフ市内では旅行会社が立入禁止ゾーンを訪れる観光旅行を企画したり、映画のロケ地として依頼があったりと、時代の流れを感じさせる。プリピャチ市内では来訪者による落書きも目立つようになってきた。



**【33】**

ウクライナ共和国の汚染地域に住むおばあさん。国内にはこうした汚染地域が7か所あり、約350人の老人たちが住んでいる。



**【34】**

おばあさんのお宅でご馳走になった昼食。野菜スープ、ドラニキ(ジャガイモのパンケーキ)、豚肉、(保存食用の)酢漬けのトマト、そして、なくてはならないウオッカ。



**【35】**

放射能汚染廃棄物処理場のあるラツツハ村。事故処理に使われた軍用トラックが並び、ここで解体されるのをじっと待っている。



**【36】**

原子炉の黒鉛、放射能汚染物を運んだクレーン。高汚染のため、そのまま野ざらしになっている。この距離からでも放射能測定器は高レベルを示している。



**【37】**

事故当時、上空から 4 号炉の消火作業にあたった軍用ヘリコプター。平和利用のための原発の事故処理に、各種の軍需兵器が使われた。



**【38】**

解体された軍用ヘリコプターの内部。